

夏 高校野球100年

岡山大会を前に

高校野球100年の歴史で甲子園の土を踏んだ岡山勢は14校(甲子園完成前の全国大会含む)。市町村別で見れば、輩出したのは岡山、倉敷、玉野、井原の県南4市だけ。ただ、かつて県北の拠点都市・津山が「甲子園初名乗り」のニュースに沸き返ったことがある。

4

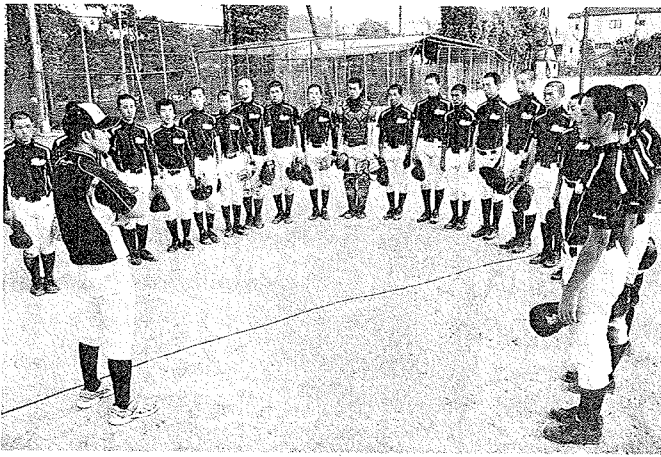
悲願 津山商

からわずか1カ月半でため息に変わった。野球部と無関係の出来事に対する厳しい判断で、現在の基準では不問に付される内容かもしれない。当時一塁手で、今は大阪府枚方市に住む松下忠正さん(66)は「悲しみしかなく、放心状態。地域住民の期待も高く、市内を歩くのがつらかった」と思い起こす。

堅守健在

傷心の津山商ナインは、続く夏も岡山大会を勝ち抜きながら東中国大会1回戦で米子工(鳥取)に0-1で惜敗し、涙をのんだ。悲願にあと一歩まで迫ったチームを率いたのが、プロ野球の阪急などでプレーした東谷夏樹氏(故人)。52年にパ

「県北初」へ思い熱く



藤岡監督(手前左)の指示を聞く津山商ナイン。県北初の甲子園へ地域の期待を集める＝津山商高

・リノ初初のサイクル安打を達成した元名選手が、厳しく鍛え上げたチームの力は本物だった。悲運から約半世紀。かつての栄光を取り戻すべく、再びプロ経験者が母校に帰ってきた。2月に非常勤コーチに就任した福井保夫氏(62)は近鉄、広島で10年間、投手として活躍。奈良県安堵町で

町議を務める傍ら、月2度のペースで古里津山を訪れ、マウンドでの心構えなどを説く。エース左腕稲尾拓真(3年)は、直球のスピードが増したと評価してもらい、自信がつくとプロ仕込みの指導に刺激を受ける。伝統の堅守も健在だ。就任3年目の藤岡弘輝監督が「真面目で我慢強く、コツコツの子ばかり」と評するように練習では基本を徹底。ショートバウンドや三遊間、二遊間など際どいコースに転がったボールをさばる「球際ノック」を繰り返す。攻守の要・土井啓太(3年)は「堅実な野球ができるようになり、どんな相手でも競り合える」。5月の練習試合では玉島商に1-3。春の県2位校を相手に接戦を演じ、手応え十分だ。

ハンディ

冬場の練習量は雪のない県南と比べ、如実に差が出る。そのハンディを乗り越え、同じ津山勢では91年に作陽が夏の決勝に進出。93、97年には津山工が準優勝した。他にも2007年秋に共生が中国大会8強と躍進したが、いまだに県北勢は甲子園にたどり着けない。それだけに関係者のまなざしは熱を帯びる。平日の週4回、選手たちにうごんを提供する津山商の後援会。田村昌生会長(57)は「甲子園出場は市民の悲願でもある。選手が最大限、力を発揮できるように、できる限りサポートしたい」と言う。チームのスローガンは「三つのココロ、動力だ。やるべきことを当たり前にする」「行動力」と自ら考えて動く「考動力」。そして苦しいときにこそ立ち向かっていく「向動力」。困難に食らいつく魂を養ったナインは2回戦敗退だった昨夏のリベンジに燃え「消化不良の試合はしたくない。最高の結果で多くの人に恩返しする」と主将の杉山雄哉(3年)は決意する。センバツ出場が決定した1967年当時、津山中2年だった福井氏は「津山全体が甲子園一色に熱くなっていた」と述懐し、無念の思いを語り継ぐ。15校目の代表校が県北から誕生することを願いながら。